

礼拝で記憶をつなぐ3 3.11と祈り

佐藤真史 荒尾教会牧師

祈りに押し出されて

「私たちは3・11以来、被災された方たちのことを祈ってきたでしょう。きつと神さまが私たちを招いているんだと思う」。

3・11から半年が過ぎた頃、仙台にある東北教区被災者支援センター・エマオからの招きに迷っていた私へ、連れ合いが語った言葉だ。この言葉に押し出されて、中学校最終学年だった私は決断した。二〇一二年春から五年間、日本キリスト教団から私はエマオへ派遣された。

3・11から一〇年が経ついま、「祈り」を鍵として自分なりに振り返りたい。

祈りの手——毎朝・毎夕、毎月十一日午後二時四十六分

「『いのちの源なる神さま』と始まる祈りが心に残っています」。

仙台を離れてもう四年になる私へ、エマオのボランティアワークに参加してくれた、ある信徒の方が送ってくださった手紙に記されていた。そう言えば、当時私はそのように祈りを始めていたと、はたと思い出す。

エマオでは、朝夕のミーティング

のたびに輪になって祈った。祈りをリードするのは、牧師でもある専従者の役割だった。夏休み期間などに集まる多くのワーカーたちは、たまたまキリスト教大学に進学した青年たち。キリスト教の祈りに間近に触れることは生まれて初めてだった。

できるだけ伝わる言葉を選んだつもりだが、おそらくほとんど響かなかったのではないか。けれども、「手を繋ぎ・輪になり・静まる」ことには、力があつた。緊張している手、優しい手、静かな手、力強い手があつた。自分自身が何を祈ったかはほとんど覚えていないが、あの手の感触は、ハッキリと覚えている。

毎月十一日午後二時四十六分には、ワークを止めて、必ず仙台市荒浜にある深沼海岸に集まった。何十人もワーカーたちと砂浜で輪になることもあれば、日曜日の午後、たった一人で祈ることもあつた。雨や雪、強い風の日もあつた。輪になり、まづ私たちは沈黙した。すると、波の音が毎回必ず聞こえてきた。いつまでも耳を澄ませなくなるような音だった。けれどもそれは、数字では

表すことのできない人々の命を奪つた津波の音でもある。

ある時、津波で娘さんを亡くされたおばあちゃんと一緒に、同じ砂浜にきた。「私は海が嫌い」。その方はつぶやいた。いま思えば、あのつぶやきも一つの祈りだった。

祈りの輪の手、そして「憎い」というつぶやき、どちらも覚え続けた。

「お宅にお邪魔させてもらってもいいだろうか」——仮設での祈り

3・11から三年が経つたある時、ドイツの教会からの来客^{*}を連れて、エマオが毎朝通わせていただいていた七郷中央公園仮設の集会所を訪問した。すると、たかこさんというおばあちゃんが、たくさんお話をしてくださった。

お連れ合いも、荒浜にあつた家も畑も津波で全部流され失ったこと。でもそこから少しずつ畑を耕し、今では、仮設の方たちに声をかけて、みんなで一緒に畑に行き、作物を育てていること。それも、少しでも仮設に住むまわりの方たちを元気づけるために、みんなに声掛けをしてい

るんだと。

ドイツからの来客は、その一つ一つに、とても丁寧に耳を傾けていた。話が一段落した時に、その一人が私にそつと尋ねた。「お宅にお邪魔させてもらってもいいだろうか」と。普段だったら、初めてお連れする方と一緒に、被災された方のお宅を訪問することはなかった。

けれども、彼の真摯な姿から、とりあえずうかがってみることにした。驚いたことに、快く引き受けてくださったのだ。実は私自身、たかこさんのお宅にお邪魔したことはなかった。

お宅に上がらせていただいて、私はまず、亡くなったお連れ合いの仏壇にお線香をあげさせていだいた。それはもちろん、仏様を拜むという意味ではなく、キリスト者として、亡くなったお連れ合いの魂の平安を祈り、たかこさんの痛みと共にあるという祈りを込めて。

驚いたのは、その私の姿を見て、客人たちも一緒に線香をあげ、祈ったのだ。キリスト教団ドイツから、教会を代表してやって来た客人たち。お線香をあげるなどというこ

とは、明らかに初めての体験だった。慣れない手つきで、でも丁寧に祈ってくださった。そして、誰よりもたかこさんがそのことを喜んでくださった。

復活のイエスがこの「祈りの場」に共におられたと、私は信じている。

不在者の祈り

3・11から一〇年が経ち、日本社会はあたかも「一〇年」で終わらせようとしているかのようだ。

そんな折、「エマオ同窓会 Zoom」が企画され、発題者の一人として参加した。久しぶりの再会にとともに励まされた。同時に、これまで終わらせるのではなく、これから3・11の近くには集まり、祈り続けたいという思いをみんなで共有することができた。

同窓会終了後、何人かでミーティング画面に残り懇談した。あるワーカーが、「ここに参加できなかった人たちのことを思っていた」と言ったのが胸に刺さり、一気に何人かの顔が浮かんだ。再会できなかった人たちの顔が。

同窓会の中でも度々出たのだが、

エマオの日々は、スタッフやワーカーたちの「バーンアウト」と向き合う日々でもあつたのだ。自分のコップがいっぱいになっていくことに気づかずに、「被災された方のために」というミッションを背に邁進し、疲れ果て、裁き合い、続けられなくなつていったスタッフやワーカーたちがいた。まったくもって「きれいなこと」ではない、「被災者支援活動」が常に抱える脆さ^{もろさ}だった。

もうエマオなんかと関わりたくないと思つた人もいたはずだし、同窓会に参加したくとも痛みを思い出すためにできなかった人もいたはずだ。けれども、そんな一人ひとりの祈りこそが、真に聞かれるべき祈りであり、事実、神はその祈りの中にあるのではないだろうか。

「一〇年」の祈り

いま私が遣わされている九州教区では、毎年3・11記念礼拝およびリタニー発行を行っている。委員会への献金も尽き、委員も私ともう一人だけで、ささやかな活動しかできない。けれども、終わらせるつもりはまったくなく、細く長く繋げていき

たいと願っている。

放射能汚染の問題は一向に解決していない。むしろ子どもたちの命は傷つけられている。復興住宅や被災地域で支え合うコミュニティを作るために奮闘していた方たちは、一〇年が経つ中で、体調を崩し始めている。「一〇年」なんかで、これらのことを忘れてしまつていいのだろうか？

二〇〇〇年もの間、イエスの十字架を覚え続けてきたキリスト者の一人として、これからも被災された方たちのことを覚えて祈り続けたい。

【注】

* 1 Evangelical Mission in Solidarity (EINS)からの来客だった。

* 2 YouTubeチャンネルで一部公開されている。 <https://www.youtube.com/channel/UCH2MxzPCKQYIF5D3ZFCWIA>



(ヤユ)・(ヤユ)